
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共共課題「身体性の人類学：もの人類学的研究（4）」

2023 年度第 2 回研究会（通算第 2 回目）

日時：2024 年 2 月 10 日（土）14:00-20:30

場所：AA 研 306

プログラム

14:00-17:30 西江仁徳(京都大学) 「身体環境化、環境の身体化：動物を追う身体の変容」

17:30-20:30 情報交換会

概要：2024 年 2 月 10 日（土）に今年度第 2 回の研究会を実施した。

当日は AA 研の共同研究員である京都大学の西江仁徳氏によって上記表題の通り研究報告と参加者全員による質疑応答が実施された。また後半では今後の研究計画等に関して全員による検討が行われた。なお、前半の西江氏の報告は以下の通りである。

報告 1：「身体環境化、環境の身体化：動物を追う身体の変容」西江仁徳(京都大学/AA 研共同研究員)

本発表は、動物研究者の身体性に着目し、動物を追う身体が現場での調査の過程でどのように変容していくのかについて紹介・検討した。日本霊長類学史における「共感法」（河合雅雄）や「生態的参与観察」（黒田末壽）の含意を確認した上で、とくに身体の動かし方（行為）や活動への参与（経験）を重視した生態的参与観察が目指したものについて、黒田のテキストの分析を通して検討した。生態的参与観察が試みたことは、たんなる動物の身体への重ね合わせ（同化）にとどまらず、同化の過程で不可避免的に生じる「わからなさ」（異化）の析出と、終わりのない同化-異化過程そのものの再検討を突きつけてくることを確認した。こうした黒田による生態的参与観察の現代的な意義を確認するために、発表者自身が編集に関わっている若手動物研究者による単行本シリーズ「新・動物記」（黒田末壽、西江仁徳編、京都大学学術出版会）のテキストを分析した。現代の動物研究は一般に自然科学（生物学）の一分野を構成しており、アウトプットとして書かれる科学論文には基本的に現場での観察者の痕跡は残っていない。これは自然科学の理想として「身体なき」観察者・分析者、つまり、観察対象に影響を与えず、観察に主観を持ち込まず、価値中立的な観察と記録・分

析をおこなうことが求められていることが背景にある。しかし一方では、動物研究者は動物の生活空間に自ら足を運び、動物の生活をなぞるように観察をすることによって、「客観的なデータ」を手に入れているという現実もある。本発表では、現代の動物研究者が自らの動物研究の現場をどのように記述し、その中で自らの身体の拡張や変容をどのように捉え、描いているのかについて、具体的なテキストを提示した。その中で、自然科学者としての立場を保ちつつ、現代の動物研究者もそれぞれの現場、対象種、目的、方法に応じた多様な生態的参与観察を実践していることが明らかになった。

参加者からは、動物研究者の生態的参与観察と、人類学者・社会学者の人間を対象とした参与観察との共通性と差異についてさまざまな意見が交わされた。その中で、動物の生息環境を自らの身体にとり込む過程（環境の身体化）や身体が環境に向けて開かれていく過程（身体的环境化）と、動物の行動を身体的に理解できるようになること（認知身体的なシミュレーション）は、共通する部分もありつつも異なる過程なのではないかという議論が提起された。また、動物研究者が対象動物に似ていくのと同様に、人類学者も対象とする人びとに似ていく傾向があるという議論もなされ、調査という営為に関わる対象への同化-異化の過程がどこまで共通するのかという問題も提起された。こうした参加者からの問題提起について発表内で十分に応答することはできなかったが、動物研究者の生態的参与観察による身体変容が、人類学や社会学といった人間を対象とした他の学問分野における調査活動や、狩猟民の生業としての狩猟活動など、どの程度広がりのある現象なのかを検討する上で重要な示唆を得た。また、現代の動物研究において拡大しているさまざまなテクノロジーの利用が、動物研究者の身体性にどのような影響を及ぼしているのか、対象動物種と人間との系統的な近さ／遠さによって身体変容や身体性にもとづく対象理解のしかたや程度が異なるのかといった問題について、さらに幅広く事例を収集して検討する必要があると考えている。

（以上終わり。）